

生活科

天 満 弥 生
早 川 佳 奈

1 生活科における「よりよい未来を志向する子」

現在の子どもにとって身近な人々・社会及び自然とかかわっていく直接体験の機会が減ってきている。子どもは直接体験を通して、発見したり感動したりしながら人間性を育んでいく。また、五感を使い、物事を感覚的にとらえる。そのため、子どもが身近な人々・社会及び自然と直接かかわる体験を充実させることが大切であると考えられる。

新学習指導要領では、具体的な活動や体験を通じて「身近な生活に関する見方・考え方」を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを明確にしている。その資質・能力の中でも特に、思考力、判断力、表現力等が具体的になるように見直されている。また、低学年の子どもには具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴があり、生活科を中心に指導の工夫や指導計画の作成を行うことと明記されている。このことから、これまで以上に低学年教育の中で生活科の位置付けが高まっていると言える。

本校の生活科では、「やってみたい」「できるようにになりたい」といった自分の思いや願いをもてるような教材、対象との出会いを工夫する。「もっとやりたい」という意欲が続く状態を保ち、目的意識を持ち続けることができるようにする。そして、活動や体験で熱中し、没頭することで、発見、成功したことを表現できるようにする。他者に伝え、表現することで、気付いたことを交流し、一人一人の子どもの気付きの質を高めるようにする。そして、学習前と学習後での自分自身の成長に気付けるようなふりかえりを工夫し、満足感、成就感を味わえるようにする。そして、自分のよさに気付き、意欲や自信をもってこれからの自分の生活に生かしていけるようにする。

以上のことから、生活科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・対象に対して自分の思いや願いをもち その思いや願いを実現させるために行動し続ける子
- ・多様な学習活動の中で 気付いたことを交流し合い 対象にさらに働きかけたり気付きの質を高めたりする子
- ・自分自身の成長に気付き 満足感 成就感を味わいながら 意欲や自信をもってこれからの生活に生かそうとする子

2 生活科における決める未来へ生かす授業デザイン

生活科の授業において、かかわる対象が子どもにとって身近であるか、くり返しかかわることができるか、子どもの発達に合っているかを十分に考えて対象を選ぶ必要がある。くり返しかかわることができる対象を選ぶことで、自分の思いや願いをもってじっくりかかわることができる。その対象と子どもが出会い、好奇心や探究心、対象への興味や親しみ、憧れなどからくる「やってみたい」「できるようにになりたい」といった自分の思いや願いをもてるようにする。対象とかかわる具体的な活動や体験を通して、自分の思いや願いの実現をめざし、対象にどのように働きかけるのかを決める。そのために教材との出会わせ方、学びに対する意欲や見通しをもち続ける手だてを工夫する。

自分の思いや願いをもって多様な活動をしていく中で、低学年の子どもは、熱中し没頭したことや、困っていること、発見、成功したときの自分のことを自然と誰かに伝えたくなる。夢中になって友達と一緒に活動する中で交流をくり返し、思いや願いが高まっていく。対象と子どもとの間でも子どもの働きかけに対して対象がどのように変化するかといった交流がくり返される。このような気付きの交流を通して、気付きの質を高めていき、多様な視点から根拠をもって対象とのかかわり方を決めることができるように手だてを工夫する。

具体的な体験や交流をくり返しながらか、対象への思いや願いを実現しようとする子どもの姿を見取る。子どもが満足感、成就感をもち、活動や体験を通して得たことを次の学習に活かしていけるように、ふりかえりのできる活動や時間を設定する。ふり返ることで、子どもが自分自

身の無自覚だった気づきを明確にし、それぞれの気づきを共有したり関連付けたりできるようにする。さらに、単元の終末で省察を行えるように、自分自身の成長や変容を価値付け、満足感や成就感を得られるようにする。そのために、対象へのかかわりだけでなく、生活の中で自分にできることを決めたり、生活に生かしたりすることができるような手だてを工夫する。

3 決める授業の手だて

(1) 学びの原動力を形成する「決める」

子どもは、自分の生活や地域の中にある対象とかかわる中で、「～はどういうことだろう」「～はなんだろう」といった思いをふくらませる。その対象が、身近でくり返しとかかわることができるものか、子どもがやってみいたいという思いや願いをもてるかを教師が見極めて対象を選ぶ。そして、何をどうやって学ぶのか、どんな子どもの姿をめざすのかを明確にし、その姿をめざすための学習活動を考え、単元を構成する。そして、子どもの心をつかめるように、対象との出会わせ方を工夫する。子どもが自分事として体験に没頭できるように、必要な物を事前に準備するなどの学習環境の構成を工夫することで、子どもが対象への思いや願いをもち、どのようにかかわっていくのかを決めることができるようにする。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

自分の思いや願いを実現しようとする過程で、子どもは自分の気づきや頑張っている自分のこと、困っている自分のことなどを伝えている。また、友達と同じ場で活動することで、友達のことを意識し、見比べ、新たな問題を発見し、解決していく。低学年の子どもは、共通の体験を通して、人と人がつながっていく。そのため、体験的な活動を十分に保証する必要がある。また、子どもが言葉や絵、動作化など様々な方法で自分を表現しようとするときには、子どもが自分なりに思考し表現しようとすることを促していく。子ども同士が自然とかかわりをもてるように、友達の活動が見えるような活動場所の設定や、全体交流の場と活動の場を分けるなどの工夫をして、かかわりの場を設定する。

また、子どもの多様な気づきを共有化したり、可視化したり、活動や思考を促すような発問を考えたりする必要がある。そして、交流してきたことを板書で視点ごとに分類する。こうして子どもが多様な視点から根拠をもって対象とのかかわりを決めることができるようにする。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

生活科では、子どもが充実した活動や体験を通して思いや願いを持つこととともに、そこで生まれる気づきを大切にしている。気づきの質を高め、次の活動や体験を一層充実したものにするには、学習活動（1単位時間・単元）の終わりに学んだことや考えたことなどをふり返る活動を行うことで認識させていく必要があると考える。そのために、単元全体の大きな目的を明確にもたせ、そこにつながる本時の目的を意識させる。そうすることで、視点に沿ったふりかえりを行うことができるだろう。

低学年の子どもが自分の学びを実感するには、表現活動を欠かすことはできない。活動や体験したことを言葉や絵、動作化などの様々な表現活動を通してふり返ることで、無自覚だった気づきが自分の中で明確になり、それぞれの気づきを共有したり関連付けたりしていく。そのため、記述だけでなく、可視化されたものや、それぞれの子どもが学んだことを交流し、学び合うことで、自分の学びをふり返ることができるようにする。

単元の終末に、自分の得た学びをふりかえる活動（省察）を行う。子どもの成長や変容を価値付け、一人一人の子どもが活動してきた事実だけでなく、自分の成長も含めて自分なりの表現方法でまとめさせる。そうすることで、子どもたちは満足感や成就感をしっかりと味わい、一つ一つの気づきを関連付け、気づきの質を高めることができる。省察することで、対象を見る目が鋭くなったり、視点を増やしたり、さらに追求したりと、対象とのかかわりが変容するだろう。対象や自分の思いや願いの変容を感じることで、自分自身や自分の生活に新たな気づきが生まれ、生活の中で自分にできることを決めたり、生活に生かしたりすることができるだろう。